

さまざまな藩札——偽造防止の工夫

東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学教授 稲葉政満

藩札の発行元は偽造防止の工夫を重ね、円滑な流通を図れるよう腐心しました。現在の日本銀行券には最新の偽造防止技術が採用されていますが、その原形は江戸時代に発行された紙幣である藩札や私札の中に既に見ることが出来ます。当時、わが国において紙の製造技法や印刷技術は高度に発達しており、良質かつ耐久性の高い紙と高度な印刷技術が藩札の流通を支えていたといっても過言ではありません。今回は、紙の保存学が専門の稲葉先生に、藩札の偽造防止についてご説明いただきました。

監修／東京大学大学院総合文化研究科准教授 桜井英治



『筑紫紀行』巻十「摂州名塩村里人紙漉図」（西宮市立郷土資料館所蔵）。摂津国名塩村（現在の兵庫県西宮市名塩）で作られる名塩紙は、秘伝の泥を混入した和紙。耐久性に優れ質作が困難なことから、多くの藩で藩札の用紙に使われた。杉の木の箱「漉き舟」の前に座って作業する「溜め漉き」の技法は現代も伝承され、国指定無形文化財（保持者 谷野武信氏）に指定されている。

日本の紙幣は有力商人が単独あるいは共同で発行した「私札」から始まりました。その最初の例は伊勢外宮の神職者兼商人であった山田御師^{おし}によって発行された「山田羽書^{はがき}」とされています（一六〇〇年ころ）^{*1}。藩札は越前福井藩が一六六一（寛文元）年に発行したのが現存しているものの最古です。

藩札は廃藩置県後の一八七二（明治五）年の調査では藩二四四、県（旧徳川直轄領で代官支配地）一四、旗本領九の合計二六七、額面を異にする種類は一六九四、

その流通高は三八五五万一二二四余（新貨換算）となっていました。同時期に藩札発行準備金全額を政府に上納せましたが、その総額は三四五万五四一八円余で^{*2}、いかに乱発されていたかがわかります。

藩札は金銀貨などと比べて、そのものの自体の価値は低く、信用の上に成り立っており、偽造や変造による利益が大きく、その対策に諸藩は苦勞したようです。そのために、用紙と印刷の

両面から工夫されました。

筆者は増田勝彦・大川昭典両氏とともに、貨幣博物館所蔵の藩札の一部について材料学的研究を行いました。その成果を交えて藩札の特徴を以下ご紹介します。

図表1 大川による藩札の分析結果

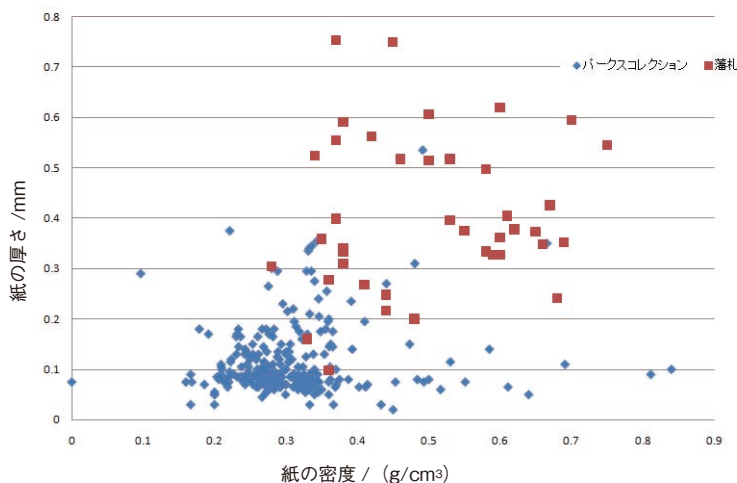
藩札 試料	銀百匁 土州銀券所	式ふん 伊予 大洲 延享三年 (1746 年)	銀一匁 (紺色) 播州	銀一匁 (茶色) 兵庫県	銀十匁	金式朱 (弁柄色) 「土佐」のすかし 慶応三年(1867年) 伊野町成山	左記シート 20 枚分
寸法 mm	49.5 × 171	46 × 166	40 × 146	36 × 144	30 × 155	49 × 164	390 × 525
面積 cm ²	84.6	76.4	58.4	51.8	46.5	80.4	2048
一枚重さ g	2.13	1.31	1.93	1.71	0.55	1.27	30.0
坪量 g/m ²	252	171	330	330	118	158	146
厚さ mm	0.709	0.441	0.497	0.545	0.303	0.440	0.471
密度 g/cm ³	0.36	0.39	0.69	0.60	0.39	0.36	0.31
繊維組成%	雁皮 65 三桎 25 楮 10	楮 60 雁皮 40	雁皮 100 楮 痕跡	雁皮 90 三桎 10	三桎 70 楮 30	楮 60 雁皮 40	—

*坪量 g/m² は、1m² に換算した場合の重さ

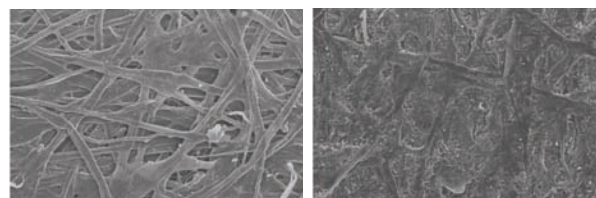
*密度 g/cm³ 体積当たりの重さ 密度 D (g/cm³) = $\frac{W}{T \times 1000}$ W: 坪量 (g/m²)

*痕跡 5%以下

図表2 一般的な和紙と藩札の厚さと密度の分布



名塩の泥土には独特の色を有する数種がある（左）。埴料ありの名塩間似合紙（下）と埴料なしの近江雁皮紙（左下）の走査電子顕微鏡像を見比べると、埴料が繊維間隙を埋めて紙の密度と平滑性を高めているのがわかる。



用紙の工夫

用紙の製造者によるその製法の秘密保持、数藩のものを製造する場合はその製法を変えること、そして、当然用紙自体が盗難あるいは横流しされないように厳しく取り締まりを行いました。この製造者への監視は現代まで引き続いており、例えば大蔵省印刷局では作業場への出入りの際に男女とも裸になり作業着に着替える処置が一九二〇（大正九）年三月まで行われていました。

紙の風合いを変えることは偽造防止に大変役立ちます。風合いを変える要素としては、繊維配合と叩解程度（繊維を水の存在下でたたく処置、叩解が進む

紙の保存をメインに、紙の技法や歴史、保存性、彩色材料の分析などを幅広く研究されている東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学教授稲葉政満先生。ご著書に『図書館・文書館における環境管理―保存科学入門―』など。



と紙が透明化して、ぱりつとしてくる）、埴料（白色・着色顔料、紙の平滑化・色調・印刷適性などを改良する）の使用があり、簡単に偽造されるのを防ぐため、現在の紙幣（日本銀行券）もその繊維配合は公表されていません。

藩札の多くは楮紙が多く、雁皮、竹、木綿、三極などを混用したものもあるとのことでした*2。

大川氏が分析した土佐、伊予、赤穂藩の藩札六種では雁皮はほぼ一〇〇%のものなど、楮単独ではなく、雁皮や三極がかなり用いられています（図表1）*3。楮単独よりも雁皮が入ることでの耐用性が増したと大川氏は推定していますが、繊維配合を変えることで、紙の肌触りが変わり、これも偽造防止への取り組みの一つとして工夫されていたと考えられます。分析した六種のうち、紙の密度が〇・六〇、〇・六九g/cm³と高い密度を示す二種は、埴料が入っていると考えられます。埴料として独自の性質を持つモ



（表）

（裏）

多くの藩札は一般には入手しにくい厚手紙が使用された。筑後柳河藩札は、表と裏で異なる色の紙を貼り合わせることで、耐久性の強化が図られている（貨幣博物館所蔵）。

ノとしては名塩紙に用いられる泥土が有名であり、この泥土には独特の色を有する数種があり、偽造防止に大きな役割を果たしました。貨幣博物館所蔵の藩札四〇種と明治四年に東京のある店で売られていた和紙（イギリス政府の命で収集されたパークスコレクションの一部、現在ロンドンのビクトリア・アンド・アルバート美術館が所蔵）の紙の厚さと密度の関係を図表2に示しました。全体として藩札は紙の密度が高く、また、藩札の厚さには随分差がありますが、貼り合わせなどしてある厚いものも多くみられます。貨幣博物館所蔵の藩札の繊維分析（非破壊での観察）では、通常の和紙製造法に比べて、繊維を強く叩解し、繊維外層をけば立たせた

* 1. 金融研究会「日本の貨幣・金融史を考える」の模様、『金融研究 16 (2)』P47-73 日本銀行金融研究所 (1997.6)

* 2. 『大蔵省印刷局百年史第1巻』印刷局朝陽会 (1971)

* 3. ワークショップ「藩札の紙質・印刷技法について」の模様、『金融研究 16 (1)』P49-65 日本銀行金融研究所 (1997.3)

摂州尼崎藩札は、3つの版木（印刷原版）を組み合わせる。版木の保管は3つに分解して、発行人・引請人・第三者などがそれぞれ厳重に管理し、藩札を自由に製造できないようにしていた（貨幣博物館所蔵）。



版木



若狭小浜藩札に施された白透かし。光を当てると「ワカサ」と文字が白く抜けてみえる（貨幣博物館所蔵）。



漉き込む方法もありました。紙の色は券種別を示す場合が多いのですが、偽造防止の役割もあったと考えられます。

透かし入れ紙は福井藩の加藤播磨が梅と鶯の文様を漉き込んだのがわが国での最初（二六六〇〔万治三〕年に藩主に献上）です^{*5}が、一六八〇（延宝八）年発行の徳島藩延宝札に早くも採用されています。透かし文様は漉簀（すきす）あるいは紗に文様を糸でかがったり、型紙を縫いつけて行う、白透かし（文様の所が白く抜ける）が基本ですが、模様を切り抜いた紙を間に挟みこんだり、木綿糸を挿入した合紙のものもあり、さらにはその内面に胡粉（白色顔料）や雲母で模様を描いたものもあります。文字としては「尾州」、「ワカサ」など藩名をいれたもの、「◎」などの文様もありました。なお、現在の日本銀行券では文様部に繊維が多くなる黒透かしを用いており、日本では、この黒透かしを入れた紙を作るためには特別の許可が必要とされています。

（フィブリル化）ものも多く観察されており^{*4}、この面でも工夫されていたことがわかりました。

そして、紙を染めたり、染めた繊維を漉き込む方法もありました。紙の色は券種別を示す場合が多いのですが、偽造防止の役割もあ

印刷の工夫

当初は墨書しこれに印判を押



銅原版

信濃全国通用札と銅原版（貨幣博物館所蔵）。銅版印刷は細かな図案を可能とし偽造防止効果を高めた。

木版印刷の場合は上下数段に分割された版木を台枠やかんぬきで組み合わせられるものもあり、額面部分を替えることで数種類の藩札を印刷できます。さらに、印刷時以外は分割して別地保存すれば、勝手な増刷の防止にもなりました。版木は通常の板目彫りでなく、印鑑等に用

いたものでした。手書きは偽造防止になります。大量生産には無理があります。

ついで木版印刷となります。木版印刷はほとんどが墨一色ですが、三色刷りのものもありました。



銅版印刷（凹版）は文化年代以来使用され、細かな図案は偽造防止対策上も大変有効でした。銅版は司馬江漢によって最初に

いられる木口彫りが、細かい細工ができるので、用いられている例が多いようです。



「モリカ」と隠し文字が印字された陸中盛岡藩札（貨幣博物館所蔵）。

藩札には偽造防止対策に通常判読できない難しい特殊文字が使われた。遠江浜松藩札にはオランダ語で「便利な」と、伊予大洲藩札には梵字をまねた創作文字で「アナメデタ=あめ、めでたい」と記されてある（貨幣博物館所蔵）。

西暦	江戸 将軍	日本・世界
1660	寛文	1661 福井藩、藩札発行(現存最古) 1661 ストックホルム銀行、世界初の銀行券発行 1670 古銭の通用禁止
1670	延宝	
1680	天和【綱吉】 貞享 元禄	1685 生類憐みの令(～1709)
1690		1695 初の金銀貨改鑄(元禄の改鑄)
1700	宝永	1707 一時的な藩札使用禁止
1710	正徳【家宣】 【家継】	1709 幕府、新井白石を登用(正徳の政治) 1714 正徳の金銀貨改鑄(正徳小判鑄造)
1720	享保【吉宗】	1716 享保の改革(～1745)
1730		1730 藩札使用禁止一部解除 1732 享保の飢饉 1736 元文の金銀貨改鑄 1739 鉄銭出現
1740	元文 寛保 延享【家重】 寛延	
1750	宝暦	●この頃イギリスで産業革命始まる
1760	【家治】 明和	1765 量目5匁と定めた新種銀貨を発行 (明和五匁銀、近世最初の計数銀貨) 1772 定量計数銀貨・南鐐二朱銀の鑄造開始 (金貨の補助貨幣を意図して鑄造された金 代わりの銀貨) 1776 アメリカ独立宣言
1770	安永	1787 松平定信老中就任。寛政の改革(～1793) 1789 フランス革命開始
1780	天明【家斉】 寛政	
1790		
1800	享和 文化	
1810	文政	
1820		
1830	天保	1833 天保の飢饉(～1839)
1840	弘化【家慶】 嘉永	1841 天保の改革(～1843) 1848 米西海岸で金鉱発見
1850	【家定】 安政 【家茂】	1853 ペリー浦賀に来航 1854 日米和親条約 1858 日米修好通商条約締結。安政の大獄 1859 横浜・長崎・箱館開港。金貨大量流出 1860 万延の金貨改鑄 桜田門外の変
1860	万延 文久 元治 慶応【慶喜】	1867 大政奉還。王政復古の号令 1867 万国貨幣会議 1868 政府「太政官札」発行
	明治	

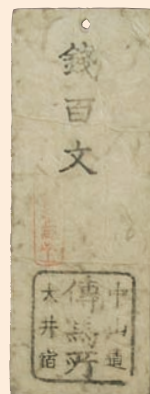
【参考】貨幣史の流れ——藩札の流通

藩札は、各藩の財政赤字補てんや幕府貨幣不足の緩和策として大きく貢献すると同時に、領民にとっても、軽量で少額でも使用できる藩札や私札は、信用保証さえ付されていれば、貨幣よりむしろ利便性が高く、広く利用されるようになっていった。

特に、商品経済発展度の高かった近畿地方や北九州などの諸藩では、藩札によって金詰まりが緩和され、各地方における交換経済の発展に寄与した。藩札の流通は全国的にみると相当に地域差はあったものの、西日本のほとんどの藩で流通しており、幕末までに全国諸藩の約8割が藩札を発行していたことから、地方経済における藩札の重要性がうかがわれる。

江戸時代の紙幣には、その大部分を占める大名領発行の藩札のほか、寺社修復費の捻出などを目的とした寺社札や公家札、宿場などで発行された宿場札、鉱山の労賃支払いに充てられた鉱山札、豪商などが発行した私人札など、狭い区域に流通が限定されたものも含め、さまざまな紙幣が発行されていた。

幕末が近づくにつれ、多くの藩の財政悪化に伴い信用力が低下し、藩札の価値は下落していく。正貨準備の充実を図れる藩はもはや希少で、結局権力で藩札消却を強行するか、あるいは乱発を重ね、さらなる暴落を招いていったのである。



美濃大井宿の宿場札。宿場・伝馬所などが発行した宿場札は、人馬賃銭の代わりのほか、宿場間の共通通貨かと思われるようなものも存在した。美濃国中仙道に面した各宿場札では、様式が統一されているものがあり、相互関係の深さを示している。

写真／貨幣博物館所蔵

越前和紙と日銀券

行われたものですが、技術者が各藩を回って製版から印刷まで行いました。その中で著名なのは銅版師松田緑山で後に太政官札等の製造にもあたることになります。

通常判読できないオランダ語(遠江浜松藩・銀一匁札)、梵字、神代文字などを隠し文字として印刷し、偽造防止を図ったものもありました。

明治政府は藩札の代わりに発行した太政官札の用紙を越前へ発注しました。これはその高い製造技術と多くの漉屋が集中して管理しやすかったことにより、太政官札用紙の生産は数年で終わりますが、印刷局での紙幣用紙の国産化は越前からの職人が中心となつてあつていました。越前の秘密を守る姿勢と高い製造技術は第二次世界大戦後の同地での日本銀行券の生産、そして現代の証券用紙などの製造へと連綿と続いているのです。

* 4. 増田勝彦、大川昭典、稲葉政満：受託研究報告「藩札料紙について」、『保存科学 No.37』P84-98 (1998)
* 5. 久米康生：『和紙文化辞典』わがみ堂 (1995)